

日本の陶芸家の作品をフランスで紹介する Maison Wabi-Sabi の主宰者である筆者が、なぜ日本の陶芸に魅了されこの仕事に携わるようになったか、作家の工房を訪ねるセラミックツアー、フランスでの日本陶芸の評価、最新のフランス陶芸事情などを紹介する連載の第1回。

ヤン・トゥーレ
Yann TOURET

〔Maison Wabi-Sabi 代表 (フランス・パリ)〕

日本語訳：萩慶子

フランスの地で、

日本のやきものをめぐる息の長い構想を形に—

M a i s o n W a b i - S a b i の 思 い

加茂川苑にて
オーナーの安田夫妻と
2009年4月



新連載・第1回

無印良品時代と独立

「日本とは一体何なのか？」

京都との出会い

日本文化との初めての出会いは、幼い頃フランスで日本アニメを紹介するテレビ番組「クラブ・ドロテ」(註1)を見ていたことにはじまります。その後大人になって二〇〇三年にアニメ「AKIRA」(註2)を見て、深い驚きと美的・文化的な衝撃を受けました。しかしすぐに「断片的な映像、感覚でしか知らなかったこの日本とは、一体どのような国なのか？」と疑問に変わりました。

「日本とは何か」というテーマを探求する中で、私は次第に、京都における貴族文化、洗練された芸術・文学、そして宮中文化が際立つ平安時代の魅力に惹かれていきました。

京都は私にとって、伝統・美そして精神性の調和を象徴しています。また定宿での経験などを通して、私の個人的な歩みとも深く結びついています。

工芸好きな母の影響で、あらゆる種類の工芸品に親しみを感じて育った私は、幼少時は大工カステンドグラスの修復家になりたいと思っていました。振り返ってみると、その頃から素材や手仕事で作られた品々に強く惹かれていたのだと思います。

フランス・

無印良品での経験

二〇〇四年十二月にパリでの生活が始まり、二〇〇五年から二〇一七年まで、MUJI France（フランス無印良品）で勤務しました。最初は販売員としてスタートし、その後様々な役職から最終的にオペレーションマネージャーまでを歴任しました。この経験は私にとって非常に重要なものでした。日本の仕事に対する厳格さや細部へのこだわりを深く理解できただけでなく、日常の中で一つ一つの動作に意味があるという、ある種の哲学も学ぶことがで

きました。

東京・池袋の無印良品本社で開催された四回の国際会議に参加したことで、日本の企業文化への理解を深めることができましたし、東京とロンドンでのビジュアルマーチャンダイジング研修では、商品の演出や陳列、視覚的なストーリーテリングに関する専門知識を身につけることができました。二〇一四年に、パリ初の無印良品フラッグシップストアのオープンに携わったことは、私のキャリアにおける重要な節目となりました。

「うつわ」の 発見

私にとって「日本陶芸との関わり」が本当に始まったのは二〇〇八年二月のことでした。私は初めて日本へ一人旅に出たのです。滞在中の二週間は、京都を拠点に雪の舞う関西地方を巡りました。寺院の静寂、庭園の美しさ、

繊細な料理、祇園の非現実的なほどの静けさ、街を行き交う舞妓たち、自然への深い敬意、おもてなし……これらすべてが私の心に深く刻まれました。そこから、ある感情にとらわれました。「ここに戻りたい」。

その後、ほぼ毎年日本を訪れ、微妙なニュアンスや繊細さ、そして矛盾さえも理解できるようになりました。フランスの作家Éric FAYE（エリック・フェイ）は著書『Fenêtre sur le Japon（日本への窓）』（註3）の中で、*“Le Japon est la planète habitée la plus proche de la Terre（日本は、地球に最も近い有人惑星である）”*と述べていますが、この「見知らぬようどこか懐かしい」という感覚に共感を覚えます。

それ以来「日本の魔法」が私に問いかけ続けているのです。京都滞在では、民宿「加茂川苑」（註4）に逗留し、そこを拠点に街の散策を楽しんでいました。宿に戻ると、部屋の小さな木

のテーブルの上には、季節のお菓子が「ひと皿」の上に置かれているのです。女将さんの八千代さんからの毎日のさやかな気遣いが、心に深く響きました。とりわけ私を強く惹きつけたのは、料理が盛られていた「うつわ」でした。お菓子と見事に調和した、美しい日本の陶磁器の色合い。「なぜ日常の品にこれほどまでにきめ細やかな心遣いがあるのか？なぜ、器と中身がこれほどまでに調和しているのか？」この疑問は私が器に特別な関心を寄せ、器を扱うきっかけとなりました。

日本の日常使いの器は、手仕事によるものもあれば工業製品もありますが、いずれも用途・美しさ・存在感を考慮して作られています。そして、陶芸家によって制作される「うつわ」が存在することを知りました。様々な形、大きさ、質感は、それぞれ特定の用途に対応しているのです。

大原三千院にて
2010年3月



旅を重ねる中で、「うつわ」についてさらに考察を深めました。特に私を惹きつけたのは、温かみのある素朴な器たちです。人間味があり、不完全でありながら独特な質感を持つ姿は、まさに侘び。手にすると、作り手や土地・技法など器自身の持つストーリーが語りかけてくるのです。日本では、陶磁器は日常生活のいたる所に存在しています。それは単なる装飾品や特別な用途によるものではなく、食事のたびに使用される、日常のあらゆる場面に寄り添っているのだと気づかされます。

Maison Wabi-Sabi の

誕生

日本各地には、陶芸専門ギャラリーによる展示や季節限定の陶器市が数多く存在することを知りました。そこは陶芸家たちが在廊し、彼らと直接語り合い、その仕事や創作への姿勢を理解

することが出来る場所なのです。日本の陶芸の品質は世界中で認められています、私が深く心を動かされたのは、何よりもこれらの陶芸家たちの歩み、その情熱、そして制作に対する強い信念でした。年々少しずつ、私は一つの構想のための自分自身の小さな資料室をつくり始めました。専門書、映像、写真、そして工房やギャラリー、重要な場所を記録していくGoogleマップ。そして何よりも大きかったのは、フランス国内外で、陶芸家や愛好家・陶芸コレクターたちとの出会いを重ねてきたことです。

二〇一七年十月、私はMaison Wabi-Sabiのフェイスブックとインスタグラムのアカウントを開設することに決めました。この情熱をできるだけ多くの人と分かち合うための、具体的な第一歩でした。

そして二〇二〇年三月、新型コロナウイルスの感染拡大が転機となりました

た。先が見えない状況は、すぐにチャンスへと変わりました。「この陶芸の情熱を事業に、人生のプロジェクトに変えてみてはどうか?」。私は、自分の経験したすべて—日本陶芸への情熱、日本文化への愛着、小売業界での実務経験、そしてマーケティング戦略とデジタルマーケティングのスキル—をこのプロジェクトに結集させることにし

たのです。
こうしてMaison Wabi-Sabiが誕生しました。

私のプロジェクトは、陶芸家の略歴を紹介するとともに、彼らの作品を販売するオンラインショップを立ち上げることです。陶芸家から直接作品を購入し、それを販売するという当たり前の方法ですが、一見シンプルに見えるこの裏には、確固たる理念がありました。陶芸家に適正な報酬を支払い、彼らの仕事を正當に評価するという当たり前のことに加えて、作品に光を当て、彼らの制作に関するストーリーを使う手に伝え、陶芸家とその作品を使う人々との間に絆を築くことが私の役割だと考えています。

他にもMaison Wabi-Sabiの目的は多岐にわたります。日本の日常に使われる陶磁器が持つ多様性を紹介するこ



おにぎりと添えられた料理 加茂川苑にて
2016年7月

と。また、フランスやヨーロッパ、そして世界の他の地域の陶芸家たちと協働すること。各国の文化間の架け橋を築くこと。陶磁器が持つ普遍性を浮き彫りにすること。そして、私たちの日常生活における工芸の重要性を再認識してもらうことです。

手仕事から生まれた器で食事を楽しむことは、私たちと食事の関わり方を変えてくれます。それは五感を刺激し、その器とのより親密な関係を築いてくれます。それは、生活の新たな形だと思えるのです。私はよく「自分はギャラリー経営者ではありませんが、日常に使われる器を販売しています」と言うのですが、この言葉は私の立場を明確に表しています。私は器を高尚なものとして扱おうとしているのではなく、生活の中で気軽に扱える日常の道具としたいのです。パリ十一区にあるギャラリー La Galerie Guilhem で、

Maison Wabi-Sabi は年に五回、日本の陶芸家作品を中心とする展示販売会を開催しています。人々が出会い、交流し、新たな発見をする場となる企画で、季節ごとにオンラインとギャラリーの両方で一斉に発表・展示即売されます。そのうちの一回は、特定のテーマや国際的に活躍する日本人陶芸家に焦点を当てた特別展となっています。

最初は二〇二二年六月に、十二人の陶芸家（フランス人八名、日本人三名、ヨーロッパから一名）から出発しました。以来、このプロジェクトは拡大を続け、現在では日本人陶芸家五十一名、フランス人陶芸家二十三名、欧州、陶芸家十三名、そしてアルゼンチン、カナダ、韓国、ラオス、ニュージーランドなどの各国から集まった陶芸家たちを紹介しています。

この Maison Wabi-Sabi のプロジェクトは、人々との出会い、陶芸作品の

新たな発見、そして四季に合わせた展示であり、今なお進化し続けています。これは私自身の歩みの延長であり、情熱が確固たる決意へと変わり、そして「陶芸を通じて世界中の人との絆を築きたい」という深い願いから生まれたものです。そして私はこのプロジェクトを推進させるべく「セラミックツアーズ二〇二三」と題した、①日本六古窯を廻る。②私のプロジェクトにすでに参加している陶芸家と会う。③新しく協力してくれる陶芸家を探す。ということを目的とした日本の旅に出ることにしました。

〔註〕

- 1 Club Dorothée FRANCE 1987-1997 放送
- 2 「AKIRA」大友克洋作 一九八二〜九〇年「週刊ヤングマガジン」（講談社）連載
- 3 Fenêtre sur le Japon Éric FAYE 著 Édition Picquier 二〇一二年
- 4 「加茂川苑」京都・祇園宮川町の民宿、現在は閉業